

5. 学術活動実施の概要

※上記4で選択した学術活動について具体的に記載してください。括弧内の概要を必ず記載してください。

- ① 英語論文公表
(著者、発表論文名、掲載誌名等、発表年月巻号、発表年月日等、論文内容の概要)
- ② 研究科教員の研究プロジェクト参加
(プロジェクト名、代表研究者名、自身の具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、プロジェクトの概要)
- ③ フィールドワーク
(調査先機関等、国名・都市名、具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、調査先の概要)
- ④ 国際会議
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、学会・会議名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑤ 研究会
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、研究会名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑥ 研究指導委託
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究、研究テーマと受入教員、受入期間(年月日)、具体的な研究活動、研究発表内容等の概要)
- ⑦ 留学
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究科、受入期間(年月日)、具体的な履修状況、研究発表内容等の概要)
- ⑧ 国際研修
(プログラム名、派遣先機関、国・都市名、派遣期間(年月日)、プログラム概要、研究発表内容等の概要)
- ⑨ 国際インターンシップ
(プログラム名、派遣先機関、配属部署、国・都市名、派遣期間(年月日)、具体的な活動、プログラム内容等の概要)
- ⑩ その他(具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度等の概要)

学術活動区分 (①～⑩を記入)	③
<ul style="list-style-type: none"> • 調査先機関等： 中国 • 具体的な活動： <ol style="list-style-type: none"> 1. 学術文献の収集：サブジェクトライブラリアンに関する文献や資料を収集する。特に、日本国内では中国のサブジェクトライブラリアン制度に関する情報がほとんど見られないため、現地での文献調査を通じて基礎的なデータを集める。 2. サブジェクトライブラリアンとの交流：大学図書館や関連機関で働く中国のサブジェクトライブラリアンと意見交換を行い、彼らの役割、日常業務、利用者支援の方法について具体的な事例を収集する。 • 活動期間： 2025年1月16日～2025年2月14日 • 活動頻度： 週に2～3回 • 調査先の概要： 中国国内の図書館や関連機関を訪問し、サブジェクトライブラリアン制度に関する資料や情報を収集する。 	

- (注) ① 年月日は西暦で記入してください。
 ② 英語論文発表については報告する学術活動において発表又は受理されたもの。
 ③ 上記に記載しきれない場合は、ページを追加しても差し支えありません。
 ④ 複数回の学術研究活動による報告の場合、適宜本ページを追加し、2つ目以降についても必要な内容を網羅してください。

6. 学術活動による成果

※報告する学術活動について、教育分野における国際的リーダー人材の育成とその研究成果を海外に発信することを目的とした教育研究創発国際研修の趣旨に照らし、その成果を具体的に記載してください。学術活動により得られた自身の研究課題につながる成果についてもわかるように記載してください。

※本欄に書ききれない場合、ページを追加しても差し支えありません。

本研修では、中国におけるサブジェクトライブラリアン（Subject Librarian, 以下、SL）制度の発展過程と現状について、文献調査および現地の図書館関係者との交流を通じて研究を行った。特に、中国の大学図書館における SL に関する研究と実践に焦点を当て、筆者が今まで行われた日本の SL に関する研究の内容も視点として、今後の日本における SL に参考できる知見を得ることができた。研修の内容について、「中国におけるサブジェクトライブラリアンの発展と現状」という報告を作成し、指導教員と共有した。本報告は全 11 ページで構成されている。以下に、その概要を示す。

この報告書では、中国における SL の発展と現状についての情報を研究と実践の二つの視点から収集している。SL とは、中国で特定の学問分野において文献選択や評価、書誌指導、情報提供などを行う専門的な図書館員と定義され、中国では 1987 年に概念が紹介され、1998 年に清華大学で最初の実践が始まった。その後、2000 年代に急速に発展し、現在では多くの大学図書館で導入されている。

中国における SL の発展は、導入期（1987～2000 年）、急速発展期（2001～2009 年）、成熟期（2010～2013 年）、そして研究関心の変動期（2014 年以降）という 4 つの段階に分類される。初期は概念の導入と清華大学での試験的導入にとどまったが、2000 年代に入ると多くの大学が SL 制度を採用し、専門性の向上や研究支援の強化が進んだ。最近では、人工知能やビッグデータを活用した SL サービスの最適化が注目されている。

また、SL の役割は進化し、「SL1.0」では基本的な情報提供に留まっていたが、「SL2.0」では研究者支援を強化し、「SL3.0」ではデータ駆動型のサービスが求められるようになってきている。特に、清華大学では SL のエンベデッドサービス（研究者・教育者の活動に深く関与する形態）を推進し、学術リソースの提供やカリキュラム支援など、図書館サービスの質を高める取り組みが行われている。中国の「双一流」大学では、SL の配置や運営体制にばらつきがあり、専門性の確立や情報リテラシー教育の強化が課題となっている。一方で、福建省の FULink など、地域ごとの SL ネットワーク構築が進められており、学術情報の共有と活用のための新たな取り組みが進行中である。

最後に、中国の SL の発展と現状についての総括が行われている。筆者は、日本の SL 制度との比較を通じて、中国の SL が制度的に確立され、数も多く、研究の蓄積が豊富であることを強調している。特に、政策的な支援が強く、2023 年に改訂された『普通高等学校図書館規程』のような公式な文書において、SL が明確に言及されている点が特徴的である。筆者自身の研究では、SL の利用者に関する研究の不足が課題として挙げられた。中国の SL 研究は利用者視点からの研究が多く、サービス提供の実践面にも重点が置かれていることが明らかとなった。筆者の研究対象である東京大学アジア研究図書館における「外部からの寄付」と SL の「地域単位での配置」という二つの特徴について、中国の SL に同様の事例が存在するか、また、正式な役職としての独立性が確立されているかについても確認した。さらに、中国の SL との直接交流を通じて、SL の評価基準や SNS の運用など、中国独自の特徴として興味深い知見を得ることができた。

今後の展望として、機会があれば中国の SL と共同で研究を進め、日本と中国の SL の活動現場を比較する調査を実施することで、より実践的な理解を深めることができる可能性がある。

また、教育研究創発国際研修の趣旨に基づき、国際的リーダー人材の育成および研究成果の海外発信を目的とした学術活動の成果についても述べる。本研修では、中国における SL 制度に関する文献調査を実施し、新たな学術的知見を得ることを目的とした。文献の収集を通じて、日本国内では十分に知られていない中国の SL 制度に関する基礎的なデータを整備した。こうした活動を通じて、筆者の研究を視点として加え、新しい発想ができた。さらに、本研修では中国の SL や図書館関係者と積極的に意見交換を行い、私自身の研究成果や日本の SL の現状についても共有した。特に、日本の大学図書館での SL の状況、そして日本の博士課程の学生や研究として生活などについても説明した。この交流を通じて、単なる情報収集にとどまらず、相互に知識を共有し合う双方向の学術交流が実現した。

本研修によって得られた成果は多岐にわたる。まず、中国の SL に関する最新の情報を整理し、日本では未紹介の事例を明らかにしたことは、日本の SL 研究にとって新たな視点を提供するものである。次に、今後日本の図書館関係者からの中国の SL に関する質問に対し、具体的な事例をもとに適切な情報提供が可能となった。また、中国の SL 制度を知ることで、日本の SL 制度の課題を再考し、新たな研究の方向性を見出す契機となった。さらに、今回の交流を通じて、国際的な SL 研究のネットワークを広げることができ、今後の研究協力の可能性についても議論がなされた。